地域学を創る３

－地域学とボランティア学－

柳原　邦光

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第12巻 第１号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.12 / No.1

平成 27 年 8 月21日発行　 August 21, 2015

地域学を創る 3
—地域学とボランティア学—

柳原邦光*

Creating the Theory of Regional Sciences, Part Ⅲ:
Regional Sciences and Studies of Voluntary Activities

YANAGIHARA Kunimitsu *

キーワード：自然, 命, 死, 市民, ボランティア
Key Words: nature, life, death, citizen, volunteer

はじめに

2004 年の鳥取大学地域学部創立以来, 教員は主に「地域学総説」（3 年生必修科目）を通して「地域学」を創る努力を重ねてきた。その成果が『地域学入門—〈つながり〉をとりもどす』[1] である。このほかにも, 地域学総説での取り組みを整理し, それぞれの時点での「地域学」を描いた筆者の「地域学総説の兆戦」と「地域学を創る」の２つのシリーズ,「地域学の現在」や授業への学生の反応を分析した仲野誠の論考がある。また「地域学総説」関係以外では,「地域学入門」（1 年生必修科目）の実践報告, 2010 年以来の地域学研究会大会報告がある。以上の論考・報告のすべては『地域学論集』に掲載されている。『地域学入門』だけでなく, こうした資料を見れば, 地域学部で生まれてきた「地域学」（以下, 地域学と表記）がどのようなものか, その形成プロセスを含めて, よく理解できるだろう。

いうまでもないことであるが, 地域学に完成はない。絶えず書き加えられ, 書き変えられる。『地域学入門』についても同じことがいえる。出版は教員にとって大きな喜びではあったが, 東日本大震災が起きてしまった。多数の人命を奪い生活を破壊した大自然の営み, 圧倒されながらも助け合って生きる東北の人達の逞しさと美しさ, 世界の様々な国や地域からの心温まる援助, 復興への道を通して見えてきた様々な問題。このような事態を前にして,『地域学入門』には何かが足りない, そういう思いが募っていった。それはいったい何なのか。この問題に取り組んで, 地域学にさらに深みを与えたい。それが本稿の課題である。

「地域学総説」は, 震災の翌年,「〈自然〉と地域学」をテーマに掲げて,「自然と人との関係」という大問題に地域学がどう向き合うのかチャレンジした。大変な難問だが, 学んだことは大きかった。第１章では, この点について論じたい。

第２章では, 日本ボランティア学会との出会いから地域学は何を吸収できたのか, 考える。日本ボランティア学会との交流は, 鳥取で大会を開催したいという申し出から始まった。わたしたち教員は

* 鳥取大学地域学部地域文化学科

学会の年次大会に参加し，学会からも代表の栗原彬さんに地域学部の地域学研究会大会（2011年度）で「地域におけるボランタリーな生き方―地域学への期待」と題して基調講演をしていただいた。学会を支えてきた「たんぽぽの家」の播磨靖夫さんと岡部太郎さんには，「地域学入門」で講演をお願いした。日本ボランティア学会鳥取大会は2013年に「ほぐす，編みなおす―ボランタリーな生き方が紡ぐ地域の新たな可能性」をテーマに実現した。素晴らしい意見交換の場となったが，惜しいことにこの大会が最後になってしまった。2014年，学会は16年間の活動に終止符を打ったのである。今年3月に「日本ボランティア学会　未完の可能性」の表題で刊行され学会誌最終号[2]には，学会の理念と歩み，関わってこられた方々の熱い思いがつまっている。地域学は学会の活動に学ばなければならない。そこで第2章では，栗原さんの基調講演と2013年度日本ボランティア学会鳥取大会，そして学会最終号から学会の活動のエッセンスと思われるものを抽出して地域学に組み込むことを試みる。

最後に，これまでの地域学に足りなかったことをできるかぎり補って，現時点での地域学を提示したい。

第1章　2012年度「地域学総説」の挑戦

地域学総説は試行錯誤を重ねながら授業として，さらに研究の場として形を整えていった。たとえば，2011年度は2部構成で，第1部では「地域学の視点」と題して，『地域学入門』の執筆者6名が『入門』で提示した地域学のエッセンスを語った。第2部では「歴史性とつながりの回復」というテーマを掲げて6名の講師が論じ，総括して，新たに「歴史的視点」を加えることができた。学部の歴史学教員2名を除いた講師4名は，「大学教員」「作家」「元市役所職員」「ソーシャルワーカー」と肩書や経歴は様々だが，いずれも「実践者」であった。地域学は大学教員の「アカデミックな知」だけでは成り立たない。生活の現場から立ち上がってくる「生活の知」「経験の知」「実践の知」が不可欠である。地域学総説はさまざまな知や知恵をもちよって「地域学を創る」場であろうとしたのである。

そのために工夫をした。まず授業プランである。全体を2部構成とし，第1部では学部教員でその時点での地域学を紹介する。第2部では，毎年新たなテーマを設定して，学外の実践者をまじえてさまざまな知を結集して問いに応える。得られた成果は翌年度の第1部に組み込み，第2部でさらに新たなテーマに取り組む。このようにして知を集め積み上げることで，地域学を絶えず更新し深化させようとしたのである。

また，地域学は大学教員と学外の実践者，さらには聴衆とのコラボレーションで創造されると考えて，実践者の講演はすべて公開にした。講師はテーマに応じて厳選し，地元や近隣に限らなかった。たとえば，2011年度は，北海道1名，東京2名，熊本1名である。聴衆のなかには，様々な形で地域に取り組む実践者や行政の方もあり，充実した質疑応答となった。講演終了後にも，講演者，市民や学生を含めて，くつろいで意見交換できる場を設けた。

2012年度の場合は，第2部で「〈自然〉と地域学」をテーマに掲げて6つの講演を行った[3]。いずれも実践的な取り組みで，具体性と抽象性を兼ね備えた素晴らしい講演であった。詳しく紹介したいところであるが，本稿ではそのうち2つを取り上げる。東日本大震災の経験を通して明確になったこととして，自然と人間の関係のもつ根源的な意義を語り，そこから生活や社会の立て直しを主張された内山節さんと新妻弘明さんの講演である。

(1) 内山節さん「自然について考える−『文明の災禍』ということ−」

内山節さん（哲学者, 立教大学教授）[4]は東日本大震災について２種類の災禍があったと考えている。自然の災禍と文明の災禍である。自然の災禍は人間にとっては災害だが, 自然にとってはそうではない。これに対して, 文明の災禍, たとえば, 福島第一原発の問題は, 人間の文明がつくりだしたものが人間の社会を破壊するということである。それは人間にとって災禍であるばかりか, 自然にとっても災禍である。

最初に自然の災禍について。衝撃的だったのは, 地震と津波で大きな犠牲を出した三陸地域の漁師さんたちの言葉である。「海は無事だ。これからも海を信じて海とともに生きる」というのである。驚きの言葉である。映像で見ただけで茫然自失し言葉を失ったというのに, 漁師さんたちはなぜそういえたのだろうか。この疑問に内山さんは「津波との間に魂の次元で折り合いがついたのだろう」と答えている。これはどういう意味だろうか。内山さんの解釈はこうである。

> いったい何が大丈夫だと思わせたのかというと, それは漁師さんたちが身体で感じたこと, あるいは生命自体で感じたこと, だから生命力自体で感じたことといってもいいわけです。つまり, 人間たちが何かを感じ取るというのは, おそらく３つのものがあって, １つは, 頭で考えて感じ取る。この場合, 頭で考えて認識するとでもいった方がいいのでしょうが, もう一つ, 身体で感じ取っていくという認識があって, さらにもう一つ, 命自体で感じ取っていくみたいな認識がある。これを僕は生命性とか, ときに霊性とかいっています。

漁師さんたちの確信は, 知性ではなく, 身体で感じたこと, 生命自体で感じたことだったのではないか。自然と向き合って暮らしてきた人々には, 身体で自然をつかんでいく, 命で自然をつかんでいく, そういう捉え方があるのではないか, それが漁師さんたちを支えているのではないか, というのである 。

文明の災禍については, 講演ではあまり言及されなかったが[5], 福島第一原発事故を通してあらわになったこととして, 以下の点を指摘された。事故以前には, 原発は遠いところにあるというイメージで, どこかリアリティがなかった。ところが実際にはすぐ隣にあった。事故は地域を人が住むことのできない空間に変え, 過去から現在へ, そして未来へとずっと続いていくはずの人の営みと時間を永遠に止めてしまった。これからは原発立地地域や周辺地域に限らず, 誰もが放射能に怯えながら, 解決不能な重苦しい課題を抱えて, 生きていかなければならない, そういう現実がいきなり目の前に現れてきた。

原発だけではない。いろんなものをイメージでつかんでいるだけで, 本当のことを知らない, そういう形で社会が展開している。戦後の日本は高度経済成長の中でひたすら経済発展を目指してきた。経済発展すれば豊かになれるというイメージを誰もがもっていた。このイメージは単なるイメージではない。社会を支配し管理していくイデオロギーとして機能した。大震災はこのことに気づかせた, というのである。

そうしたなか表に現われてきたのは, 日本の社会は完全に行き詰まっている, 一緒にこの社会をつくり直そう, 自分たちの生活の仕方も仕事のつくり方も, 人と人との結び方, 自然との結び方も見直そう, 地域も考え直そう, という動きである。たとえば, ソーシャルビジネスである。自分たちが考える社会的な使命を実現するために経済活動をしたい, そのためにどういう経済の仕組みをつくったらいいのか, 考えよう, みんなと一緒に地域づくりなどをしながら, 自らも生活できるようにしてい

く，そういう楽しさの中で生きたいと思う人たちが現れてきた。

地域観も変わりつつある。被災地に毎週のように行って地元の人と一緒になって頑張っている人たちがいる。彼らにとってそこもまた地域であり，住んではいないけれども自分たちも地域住民だという感覚が芽生えている。実際，地域は外にいる人たちとつながっていかないと強くならない。地域を復興させるのは内部の人たちが出発点だが，外にいる人たちと相互の関係も必要である。

さらに自然との結び方である。自然とともに生きたいと願う，しかし，何か起きたときに自然を被害者にしてしまうようなものを残しておいて，自然とともに生きるといえるのだろうか。亡くなってしまった人たちとの関係を含めて，大震災は人の生にとって根源的なものは何かという問いを突き付けたのである。

このような動きのなかで，課題として見えてきたのは，自然を認識していく場合でも，単に知性で認識するだけではなくて，身体でとらえる，さらには命自体でとらえる。その身体や命でとらえられたものをどう地域づくりに生かしていくのか，あるいは地域の復興に生かしていくのか，ということである。以上をまとめて，内山さんは次のように締めくくられた。

> 自然であれ何であれ，これからどういう関係の中で生きていくのか。これまでは，東京のイメージがあったり，消費のイメージがあったり，豊かさのイメージがあったり，そんなイメージの中に取り込まれて生きてきました。しかし，これからはそうではないだろうという気がします。むしろ確かにつかみ取れる関係，そういうものを軸にしていろんなものをつくり直していく。確かにつかみ取れる関係を知ったとき，その確かさの中に，知性という頭で考えてつかみ取れる関係もあるけれども，身体を通してつかみ取っていく確かな関係もあるし，命自身を通してつかみ取っていく確かな関係もある。そういうことも回復しながら，これからどんな関係の社会をつくるのか，それが今回問われているという気がします。

この結論については，聴講者から質問が出た。東京のような大都市の住民にとって身体性や生命性を通して確かな関係をつくっていくことなどできるのでしょうかと。内山さんの回答は次の通りである。都市は，都市だけで自己完結したら完成しない。都市はどこか田舎と関係をもって成り立っている。田舎と関係をもつことを通して都市に足りないものを補ってきた。また，田舎も自給自足ではなく，今や都市と関係をもってこそ動くことができる，生きることができる。都市も田舎的世界も互いに補い合ってこそ存続できる，ということである。

(2) 新妻弘明さん「地域とエネルギーから現代文明を問い直す−震災を体験して−」

次に新妻弘明さん（東北大学名誉教授）の講演である。新妻さんはエネルギーの専門家で，ご自身も仙台市で被災されている。

講演は一枚の写真から始まった。地震と津波に破壊され，瓦礫がえんえんと広がるなかに，人の姿がポツンと小さく映っている。自然のとてつもない力と人間の無力さ。新妻さんはいう。「もうわけがわからない。でも生きていかなければならない。そういう状況に放り込まれたとき，みんな，必死で考える，考えるというか，身体で考える，身体で思う。そうすると誰もが哲学者になる。」そして「これまで見えなかったものが，いきなりあらわになった。」それは何なのか。新妻さんが講演全体を通して考えよう，伝えようとされたのは，まさにこの点である。

最初に指摘されたのは，現代社会の抱える問題である。現代社会はさまざまな巨大システムに依存

した「点滴社会」であり，「切り身社会」である。どういうことかというと，人は自分では何もしないで，システムによって生かされている。システムとはお金でしかつながっていない。お金がなければ切り離されてしまう。そうすると，あるいはシステムが破壊されると，自分ではもうどうにもならない。それはベッドで点滴を受けている病人のようなものだ。点滴で供給される栄養源だけを頼りに生きているから，点滴が切れると死ぬしかない。同じように，電力・水道・ガス・通信などの諸々の巨大システムから切断されると生活できなくなる。だから「点滴社会」なのである。また，日常生活が自然とつながっていないから，見るのは自分のところだけで全体を考えようとはしない。スーパーで切り身を見て，それが魚だと思うようなものだ。社会のごく一部しか見ていないのにわかった気になっている。だから「切り身社会」なのである。

まとめれば，今の生活は快適だが，巨大システムに生かされているだけで，当事者として生きてはいない。頭だけで考えて，それがすべてだと思い込んでいる。身体で考える，身体で思うことはほとんどできない，ということである。

このような生活を可能にしたのは科学技術であるが，新妻さんは科学的思考それ自体にも問題があるという。科学は事実よりも理屈を重んじる。科学的根拠がなければ，事実として認めないから，事実として存在しないことになる。また，科学が重視するのは，自己をなくして，ものごとを客観的に見ること，普遍的に考えることである。換言すれば，当事者性を排除することである。評価されるのはどこででも通用する「普遍的な知」であって，ある地域だけで確認されるような具体的な事実はしばしば軽視される。たとえば，東北地方は数百年おきに大地震や津波に見舞われ，大きな被害を出してきた。それにもかかわらず，人の生存に関わる，最も重要な事実が伝えられ活かされてこなかった。どうしてこのような歴史的な知の断絶が生じたのか。地域の知や伝承を軽視して，「普遍的な知」だけを追い求めることで，科学の力，人間の力を過信して，「これだけ文明が進んだのだから，津波はこない」と思い込んでしまったのではないか。

もう一つ指摘されたのは，グローバリゼーションのもとに，人間も地域も国も「個」を喪失してしまい，自分である必要のない人間，ここである必要のない地域になってしまった。その結果，それぞれの個性と相互の関係性が軽視され，地域固有の風土としての地震も津波も忘れられるなかで，原発事故が起きてしまった，ということである。

それでは被災して人々が気づいたこととは何か。それは自然のさまざまな姿と，人はそういう自然と向き合って，折り合いをつけて，暮らしてきたこと，死が身近であり，死を見つめることが人生を考えることではないかということ，そして「命を託す」ことである。

まず，自然について。自然と向き合い，受け容れ，折り合いをつけて生きるとは，どういうことなのだろうか。新妻さんの言葉に耳を傾けてみよう。

> 自然というのは時におっかないが，優しさもある。本当におっかないけれども，優しいところもある。あと，みんながいうのは，漁師さんなども海に恨みはないといいます。あんなにひどい目に遭って，家族をみんな殺されて，恨みはないというのです。それに対して，原発とか東電，みんな憎い，憎い，憎い，といいます，東電が憎い。でも海には恨みがないというのですね。怖いということはあるが，恨みはないと。

また，ある海辺の地域に躊躇いながら支援物資をもっていったときのエピソードも紹介されている。

それで，支援物資を持っていって，その施設の避難所みたいなところに行って，いやあ，ここのワカメはおいしくてね，うちの母ちゃんが買ってくるのがおいしいからね，と言い訳して入るわけですよ。そして支援物資をもらっていただけますかといったら，そこの漁師さんが，もう少し待っていてくださいというのですね。彼らはいくらひどい目に遭っても海を見ています。もう少し待ったらワカメはすぐとれると，もうプロですから見ているのですね。もう少し待っていてくださいといわれた。救われました。こんなにひどい目に遭ってもそこに海の恵みはあるぞと。それを我々は町場の人たちのためにとってやっているのだと，だから，またとってやるから待ってなさいよといってくれた。ありがたかったですね。

新妻さんは，被災して「弱者」となった人たちを助けにきた支援者＝「強者」として接することにためらいを感じておられたようである。ところが，訪ねてみると，被災された人たちは弱者ではなく，「確かな何か」をもっている人たちだった。新妻さんの目に映ったのは，海を信じ，海とともに生きてきた人たち，自然としっかり向き合ってきた人たちの強さだった。

次に死と「命を託す」について。新妻さんはもう一つエピソードを紹介された。津波で家が流されて，ある家族が屋根の上に逃れていた。たまたま家が土手に流れついたので，お父さんは家族を岸に渡らせた。ところが，家が岸から離れて，お父さんひとりが屋根の上に取り残されてしまった。そのとき，お父さんは満面の笑みを浮かべて「バイバイ」といいながら流されていったというのである。お父さんはそうすることで家族に「命を託したのです。生命体というのは子孫に命を託すことが最大の目的なのです。生命というものは，そういう風にできているのです。」

被災して新妻さんが身体で感じとったのは，「自然」と「命」と「死」に向き合ってきた人たちの強さ，すごさである。そしてそれを生み出したのが「地域」だということである。

地域について新妻さんのお考えをまとめれば以下のようになる。人は長い間ずっと地域で自然と向き合って暮らしてきた。動植物などさまざまな命と依存し合い，つながって生きてきた。互いの命を慈しみながら暮らしてきた。また何世代もの死者の思いを背負って，託された命をどう生かすのか自問しつつ，後に続く世代のことを考えながら生きてきた。このような関係性のすべてによって成り立っているのが地域である。世界を驚嘆させた被災者のすごさは，このつながりの豊かさからきている。それゆえ，地域には個人の意思以上のものがある。地域は「心の原点」であり「文明の基盤」である。重要なのは，「普通の地域の，普通の人々の，普通の営み」である。地域で，地域から考える。地域を見つめ，地域を学ぶ。復興の原点は，地域を生きる人々の心とは何なのか，ということだ。真の復興とは「もう一度，ここで生きていくというところをつくること」なのである。

このような理解を示したうえで，新妻さんは続けていう。今，わたしたちは「文明の分岐点」に立っている。これまで通りの形を続けて破滅するのか，それとも環境と共生する文明へと転換するのか。重要なことは，どのように舵を切るのか，震災の教訓をどう活かすのかである。

そうだとすれば，どうすればいいのだろうか。具体的に何ができるだろうか。新妻さんの提案は，地域で考えること，地域の人々の生活必需（暖とか浴用とか生活用水など，生活に欠かすことができないもの）から考えることである。新妻さんはご専門も実践活動もエネルギーなので，「地域にあるエネルギーを地域のために生かす」(EIMY, Energy in my yard)[6]ということで，自らの実践活動を例に挙げて説明された。エネルギーは３種類ある。ひとつは国家規模のエネルギー戦略として数値や統計のみで表現され政策として検討される「戦略エネルギー」（たとえば，温暖化対策としての CO_2 の削減問題が関わってくる），２つ目が商品として売り買いされ，利便性・価格・カロリー・ワット等

の指標で採算効率が問われる「流通エネルギー」（電力会社が供給する電力）である。最後に「自給エネルギー」である。自給エネルギーとは，誰でもできる技術で，自らが当事者になって手に入れる安全安心なエネルギーである。例えば薪ストーブや温泉の利用である。そこには生活必需のものを自然の中で自然の恵みを感じながら自然と共生して生産する喜びがある。人が互いに助け合って手に入れることができるものでもある。生活の豊かさとか食の豊かさとか，そういう多様な関係性で結ばれていることを感じながら手に入れるエネルギーなのである。

新妻さんは巨大システムのもたらすエネルギーを否定するわけではない。産業にも生活にも必要である。しかしそれだけでなく，自分の手で何とかできるエネルギーをつくっておくべきだというのである。エネルギー量からみれば，巨大システムの供給するエネルギーの方がはるかに大きく，お金を払いさえすれば利用できるから便利である。「自給エネルギー」はとても小さくて手間がかかる。しかし，たとえ生活に必要な電力の１％を供給するにすぎなくても，震災のとき薪ストーブが暖を提供してくれたように，命をつなぐことができる。そのうえ，自給エネルギーの背後にある関係性は多様で深い奥行きがある。長い人間の歴史を顧みると，暮らしを根底で支えてきたのは紛れもなく自給エネルギーであり，その知と知恵は今もそれぞれの地域で蓄積され伝えられている。新妻さんはこのような２つのエネルギーを活用する形を「デュアル・エネルギー・パス」と呼んで，できるだけ自給エネルギーの比率を高めたいという。それが環境との共生につながる道であり，同時に人の生をより豊かにしてくれると考えるからである。

最後に新妻さんの結論ともいうべき言葉を引用しておこう。

> 環境共生文明をつくるというとき，どんな社会システムでも，どんな製品でも，どんな文明でも，一人一人の心にまで落とし込まなければ本物ではないと思います。だから，何か非常に単純な原理をもっていれば自然に環境共生になるような仕組みを我々専門家とか知識人みたいな人がつくっていかないといけない。私は「いのちをいただき，いのちをいかす」，これをただ一つの原理にして考えていけば，間違いないのではないか，何か非常に単純な原理を拠りどころにしていくことが重要ではないかと思います。

「いのちをいただき，いのちをいかす」は意味深い言葉である。ここでいう「いのち」は人間の命だけではない。自然とともにある「生きとし生けるものすべて」である。人間もまた自然の一部であり，そういうものとしてあらゆる命を生かしきろう，ということである。

(3) 自然と向き合う

以上が内山さんと新妻さんの講演の要旨である。そのなかで最もインパクトがあったのは，自然と向き合って暮らしてきた人々の強さ，すごさである。三陸の漁師さんたちの現実を受け入れる態度，確信に満ちた言葉や海への信頼感である。そのような感覚はなぜ生まれるのだろうか。内山さんは，知性・身体性・生命性という認識の３つのレベルで説明された。表現は異なるが，思いは新妻さんも同様であろう。人間もまた自然の一部であり，そういう存在として，わたしたちのなかには，知性を超えた，言葉では説明できない捉え方がある。「確かな何か」は，漁師さんたちのように自然と向き合うなかで，このような認識の仕方を通して，得られるのであろう。

率直にいえば，筆者の場合，島根の山奥で育ったせいか，海をみると，その大きさ広さに気持ちが開かれる思いがするが，やはり怖さがある。海への信頼感というのはピンとこない。しかし，海を山に，

あるいは山村の自然に置き換えれば，漁師さんたちの気持ちに少しは近づけるような気がする。「身体で考える，生命で感じ取る」という感覚は自分のなかにもないわけではない。歳を取るにつれて感じるようになったというか，あるいは蘇ってくるというべきかもしれないが，考えるときのベースになりつつある。

お二人の講演は，自然と「いのち」との深いつながりと，自然とともにあることで過去から現在へ，未来へと続いていく「いのち」の永続性とを感じさせる。このとき人は自ずと謙虚になるのだろう。

こうした理解と対照的なのが，イメージだけの社会，点滴社会，切り身社会である。それはさまざまな巨大システムに支えられた暮らしがいかに自然から切り離されているか，わたしたちがどれほど当事者性や様々な関係性を見失っているか，を見事に物語っている。この隔たりを埋めなければならない。もちろん，内山さんも新妻さんも巨大システムを全面否定しているわけではない。人の暮らしと生を根底において支えてきたものをしっかりと見つめて，暮らしのなかに少しでも自然とつながる部分をもとう，暮らしの場である地域から考えよう，そこから自らを省みるとともに，社会のあり方を見直し，立て直そうというのである。

先述したように『地域学入門』を出版した時，何かが足りないという思いがあったが，それが何なのか，はっきりしてきた。わたしたちが，地域学が，常に見詰め続けるべきもの，立ち返るべきもの，それは究極的には「いのち」である。自然とともにあるいのち，自然の一部であるいのち，である。「いのちをいただき，いのちをいかす」ということである。そのためには，謙虚に自然に向き合うこと，死と向き合うこと，自然と人間との関係を捉え直すこと，それが地域学の出発点なのである。

第２章　日本ボランティア学会の活動に学ぶ

筆者が日本ボランティア学会の存在を知ったのは，『地域学入門』を出版して学会から鳥取大会の開催依頼を受けたときである。それで学会のホームページを見て驚いた。そこで掲げられている理念はわたしたちの構想と実によく似ていた。年に一度発刊されてきた学会誌の目次には，地域学が取り組むべきテーマがすでにずらりと並んでいた。日本ボランティア学会がわたしたちの先達ともいうべき存在であることは明らかだった。ただ，気になる点もあった。「市民」「市民知」「ボランタリー」がキーワードになっていたからである。３つの言葉は個人の自発性や主体性，自律性を重視しているが，『地域学入門』ではほとんど使っていない。協議してそうしたわけではないが，人間の意思，自律性，政治性を重視する「市民」に普遍的な人間像を感じたためであろう[7]。地域学の場合，「地域性」を認めることが大前提である。地域性は自ら選びとったものではなく，いつの間にか身に着けたものである。それだけに自分に向き合った時，無視することのできないもので，支えでもあれば制約でもある。「わたし」という存在が地域の自然や歴史，文化など，いってみれば様々な「他者」が折り重なるようにしてできたものだとすれば，自発性・主体性・自律性と地域性との関係をどう考えればいいのだろうか。表現を変えれば，ボランタリーな生き方の力はどこから生じるのだろうか，ということなのかもしれない。こうした点も検討してみたいテーマのひとつである。第２章では，この問題を含めて，日本ボランティア学会の活動から地域学は何を学びとることができるのか，加えることができるのか，考える。

(1) 日本ボランティア学会の目指してきたこと

そもそも日本ボランティア学会はなぜ生まれたのだろうか。何を目指してきたのだろうか。これ

については学会誌の最終号に掲載された基調講演「日本ボランティア学会の『初心』『核心』『残心』」で代表の栗原彬さんが振り返っておられる。それを簡潔にまとめてみよう。

学会が設立されたのは1998年12月であるが，その背景に1980年代から90年代にかけての状況の大きな変化があった。全体の生産力を増せば増すほど人間は豊かになって幸せになるという「生産力ナショナリズム」や市場原理優先の政治（システムの政治）が前面に出て，競争原理と優勝劣敗，自助努力と自己責任を当然視する動きが顕著になるなかで，コミュニティの解体や労働組合の衰退など共同性が失われ，社会資本や公共空間が破壊され，環境破壊も進んだ。要するに人々の暮らしを支えてきたものが解体・破壊され，個人が孤立していったのである。これに抗して市民活動・ボランティア活動が拡大し，新しい道を拓くための知的作業が求められるようになった。

このような状況への応答として，学会は「もう一回つながりを社会からつくっていくこと」を目指して，活動の現場で生まれる経験知を集め，統合し，理論化して「市民知」として現場に戻していくという実践と知の循環プロセスをつくろうとした。このプロセスはいかにして成り立つのだろうか。起点となるのは個人の自発的意思と主体性である。が，危惧もあった。市民活動を進めるには母体となる組織の強化が必要であるが，そのために組織が主体となって，組織を担う市民の存在は希薄になりがちだからである（組織原理の優位）。「個としての市民，個としてのボランティアの危機」を直感して，学会は個としての市民の主体性を大切にするボランティアであろうとした。学会のいうボランティアとは，なによりも個人の自発的な意思に発するもの（個人原理）なのである。

次に，活動の場のひとつとして，また市民知が練り上げられていく場として，学会は研究大会（年１回）を重視してきた。大会は「地域で市民知を編み直す」ために，大会が開催される地域で２，３年かけて準備された。「地域で」は，地域の人々がプラン作成段階から参加することから始まる。実行委員会をつくって学会の運営委員会と協議を重ねつつ，大会テーマを設定し，地域の実践者を含めて課題に向き合うのだが，そこでは異なる生き方，考え方や感じ方をもった様々な人たちが，生きるということの切実さを抱えつつ，ともに飲んだり食べたりするなど，いわば身体感覚で親密さを感じながらコミュニケートする（「異交通」）。そうするなかで，個人の問題だと思われたことが公的なことに転換していく。栗原さんによれば，大会の準備過程は，親密圏と公共圏・公共空間との間に「もうひとつの公共空間」とでもいうべき「親密な公共空間」をつくり出す場となった。つまり，地域で「親密な公共空間」が生まれるなかで，問題と向き合いつつ市民知が編み直されてきたということである。

こうした試みの成果として，「地域を編み直していくことにつながっていくような市民知が共有された」。「地域を編み直していく市民知」として，次の６点が示されている。①地域づくりは当事者起点，市民起点でなければならないということ。②市場原理とは異なる「もてなし」（歓待，贈与，互酬）によって暮らしをみんなにとって心地よい（コンヴィヴィアルな）ものにしていくこと，③地域の暮らしに根差したもの，その土地で生きている言葉，振る舞い方，感覚（ヴァナキュラーなもの）を大事にして共生を構築すること，④引き裂かれた当事者・市民・自然を「存在の現れ」によってつなぐこと，分断された人々同士や生命系と人間とを身体を使ったアート（手のわざ）でつなぐこと，⑤苦しむ者，弱い者，小さい者に向かい合うとき見えてきた，公共圏や公共空間には３つの次元があるということ，「公益」（何を価値とするか，何を生き方の基準とするか），「公論」（言葉による熟議だけでなく，デモのような身体を使った意思表示を含む），「公的な決定」（誰が決めるのかという問題）である。⑥当事者・市民のボランタリーな生き方と制度的な政治（システムの政治）との関係について，ボランタリーな生き方自体がひとつの身振りとして政治になるということである。

「市民知」を理解するのはなかなか難しいが，筆者はそのエッセンスを次のように解釈した。まず

はボランタリーな生き方である。その出発点は「一人ひとり」ということである。自分の意思だけでなく，暮らしのなかで身につけたもの，他の人々と共有しているものを含めて，自らの内にあるもの，切実なものをみつめ大事にすること，それが自ずと現われ出るようにすることで様々なものとの間につながりが生まれる。「一人ひとり」がもっているものを尊重し合いながら異質な他者と交わることで，「親密な，もうひとつの公共空間」が開かれ，制度的な政治（システムの政治）のなかに個人原理に則った新たな政治を割り込ませることができるということである。

ボランタリーな生き方については，栗原さんの地域学研究会大会での講演「地域におけるボランタリーな生き方―地域学への期待」[8]を参考にして，もう少し補足して考えてみよう。ボランタリーな生き方とは次のようなものである。生存と排除，生存と死というぎりぎりの場に立ったとき，自然や動物，人間や死者など「他者の声」の訪れがある。それに命が応答して，働きかけの技である身体とともに共助や共生という関係が始まり，すべての命に向けられていく。さらに命は身近なところから公共圏へと踏み出していく。それは「もうひとつの公共性と政治」であり，民意を通す政治的な回路を構築することと，行政に公助の公的責任を問うという２つの側面がある。つまり，ボランタリーな生き方とは，他者の声に命が応答すること（当事者起点）から始まって，身体の技，共助と共生，もうひとつの公共性と政治に入ることへと至るのである。このようなボランタリーな生き方をする人が「市民」である。

以上をまとめれば，「もう一回つながりを社会からつくっていく」とき，軸になるのは，一人ひとりの命と，その命によって他者の声に応答し実践するボランタリーな生き方であり，その主体が市民だということである。そして市民の生きる具体の場が地域なのである。

(2) 市民のボランタリーな生き方を支えるもの

以上が筆者の理解した栗原さんのお考えであるが，なかでも特に注目したいのは，「命」ということと，命が他者の声に応答するということである。さらにもうひとつ，「公益」という言葉で示されている「何を価値とするか，何を生き方の基準とするか」という指摘も重要である。この点について，2013 年日本ボランティア学会鳥取大会のセッション１「不確かさを生きる技法―ボランタリーな生き方と地域」に登壇された播磨靖夫さん[9]の講演と学会誌最終号に掲載された「日本ボランティア学会の歩みとその背景」での発言から，栗原さんとは少し異なる角度から考えてみたい。

講演では新聞記者時代の仕事や現在の「たんぽぽの家」の活動を中心に紹介されたが，その冒頭で自らの基本的な姿勢を次のように語られた。「遠いところ，弱いところ，小さなところへ身を置くことが自分の人生のスタンスである。よく分からなくなったら，そういうところに身を置いた方がいろんなものが見えてくる」。そうして見えてきたのが，人間の都合で破壊される自然，障がいのある人や過疎の村のこと，軽視されがちな「地域で育まれてきた知」である。いずれも近代化のなかで無視されたり取り残されたりしたものであるが，そこにこそ社会を変革していくための芽，チャンスがあるのだと。

次に，播磨さんの様々な活動のなかから，筆者が特に重要だと考えるものを２つ紹介すると，ひとつめは「わたぼうしコンサート」「わたぼうし音楽祭」である。これは障がいのある人たちの詩に町の音楽の好きな若者たちが曲を付けてみんなで歌うコンサート，音楽祭である。「自分たちの歌を好きなように作り，好きなように歌っていい，それが音楽だ」と考えて，音楽を通して障害のある人たちの思いを伝えようというのである。このお話をきいて，是非参加したいと思い，講演の翌年（2014 年），奈良市で開催された第 39 回わたぼうし音楽祭に行ってみた。そこで強く感じたのは，障がいのある

人たちにとって，胸のなかにあるものを素直に言葉にして，仲間とともに歌うこと，歌われることが，いかに大きな喜びであることか，ということである。同時に筆者のなかにも喜びと深い感動があった。「なるほど，これでいいんだ」と納得して，なんだか気が楽になった。音楽祭は今やアジアの各地で行われているということだが，そう思わせるものが確かにあった。

同じことは「エイブル・アート・ムーブメント」（可能性の芸術運動）にもいえる。これは「アートを通して，誰もがもっている様々な隠れた可能性，天分を開花させて，仕事につなげ，人間としてのプライドを獲得する運動」であるが，ここにも自分のもっているものを素直に表現する喜びと自己肯定感がある。人を共感させる不思議な何かがある。それだけではない。障がいのある人たちは，表現したものが評価され仕事となることで，すなわち社会とつながることで，自分自身に，自分の才能に，そして自分の芸術的な行為にプライドをもつようになるという。これこそ「命の充実」であろう。

播磨さんは講演の最後で，日本人は東日本大震災に大きなショックを受けたが，新しい意識の目覚めもあったとして，それが何か，手短に語られた。それも含めて，播磨さんのお考えをまとめると次のようになる。播磨さんが理想とされているのは，わたしたち一人ひとりが自分の「命」を生ききること，「命」の充実ということであろう。その第一歩は自らの「内なる声」を聴くことである。人間がすべて，自分がすべてではなく，人間も生き物の一つであり，地球生命系のなかの存在であることを自覚して，自然への畏敬の念と謙虚さとをもって，自然と「命」に向き合い，「他者」の声に耳を傾ける。そこから自発性や自律性は自ずと生まれる。このような内から発するものにしたがって，自分たちで生活の仕組みを作り直し，新しい生き方，新しい共同体の倫理をつくろう，ということである。

最後の点について，学会誌最終号に掲載されたケアに関する発言から補足すると，社会を変えようとするとき何を基軸に再編するかといえば，人のつながりを分断する「モノ・カネ・制度」ではなく，「人・生活・生命」である。常にそこを見据えて，地域の生活のなかから再編していくことである。そのためには，専門知とアマチュアの自由な発想，身体的直感，暗黙知とを組み合わせて，地域の現場で知を鍛えつつ問題を解決していくことが必要だ，ということである。

「ボランタリーな生き方」という表現の根底にあるのは，このような理解なのである。

(3) 自然といのち

ここでは自然と「いのち」との関係からボランタリーな生き方について考えたい。紹介するのは，日本ボランティア学会鳥取大会のセッション１「不確かさを生きる技法―ボランタリーな生き方と地域」の登壇者である松場登美さんと，セッション３「地域の隣人としての 3.11 避難者とともに生きる―福島からの三人の避難当事者の声を聴きながら」に登壇された大塚愛さんである。

松場登美さん[10]は，かつて石見銀山のあった島根県大田市の山間の町，大森町で，古民家を生かしたライフスタイルブランドの群言堂と生活文化の継承発展を目指す宿泊施設「他郷阿部家」（元武家屋敷）を経営されている。松場さんの心境は，著書である『群言堂の根のある暮らし―しあわせな田舎 石見銀山から』を開くとよくわかる。

> 山の中腹から眼下を見下ろすと，緑深い山あいに赤茶色の瓦屋根がきらめく集落を一望することができます。四方を山に囲まれた，まるですり鉢の底のような小さな町。この場所に身をおくと，自分が今ここに生きていることをひしひしと感じ，気力が湧いてくるのです。ここがわたしの居場所。大丈夫，ここでならやっていける――。

本当に素晴らしい言葉である。このような感覚で日々を過ごすことができれば，どんなに幸せだろうか。

松場さんは講演で，自身の町について次のように語られた。自然があり，歴史があり，独自の文化があり，コミュニティがしっかりしている町は，何もないのではなくて，足元を見れば宝の山でした。大森町で暮らして「土地の声」や「家の声」を聴くことで，自分なりのモノサシと，古き良きものを残しつつ，新しい良きものを創造する「復古創新」の生き方を身に着けることができましたと。ここには，大森町という町の自然・土地・家・歴史とそこに生きる人との豊かなつながり，見事な相互作用がある。

松場さんの暮らしを見ていると，第1節で確認した，命が他者の声に応答するということ，「何を価値とし，生き方の基準とするか」ということの重要性がよく理解できる。松場さんのお話を聴かれて栗原さんは，その暮らし方を「生の不確かさのなかにあってボランタリーな生き方を紡ぐ技法である」と評された。松場さんのボランタリーな生き方を支えているのは，このような地域と人との相互作用である。松場さんの表現でいえば，「根のある暮らし」なのである。

次に大塚愛さんである。大塚さんは，現在，岡山県で「子ども未来・愛ネットワーク」という市民グループの代表として，子どもを放射能から守るために福島県から自主避難する親子のサポート活動や保養支援をされている。

岡山県のご出身であるが，1999 年から「3. 11」が起こるまで福島県に住まいされていた。双葉郡川内村の自然が気に入って，自分で小さな小屋を建て，電気も電話もないところで，作物を育てながら，自給自足の一人暮らしを始められた。その後，4年間大工修業をしたのち，設計士のご主人と出会って，川内村に新居を建て 2 人の子どもにも恵まれて，自然のなかで，自然の恵みを楽しみながら穏やかな暮らしをされていた。ところが，時間をかけてつくってきた，すべてが手づくりの暮らしは福島第一原発事故で一瞬のうちに失われてしまった。家にも庭にも畑にも，山や川にも放射能が降ってきた。「それまで穏やかに暮らしていた世界が，音を立てて崩れていくような出来事でした。」岡山県の実家に避難して，深い悲しみに沈むなか，「自分にも何かできることがあるはず」，自然のなかで思う存分遊んでもらいたい，そう考えて，子どもたちを被ばくから守ろうとしている人たちを岡山から支える「子ども未来・愛ネットワーク」を立ち上げたということである[11]。

大塚さんのことを知ったのは，2011 年度地域学研究会大会で栗原さんが紹介されたからである。すべてを失った大塚さんは，「でも，いのちがあって，私たちは生きています」といわれたという。この言葉を栗原さんは次のように受け止められている。

> 残された命がある。だから，人生の意味を問うのではなくて，命の方が彼女の生き方を問う，命に生き方を問われている，という感覚なのですね。そういう命の声を聞いた，その声に衝き動かされるようにして「子ども未来・愛ネットワーク」を始めるし，アロハＤＥハイロのフラを踊ったのですね。彼女がイマジンで踊る場面を見ましたけれども，祈りに近いような踊りです。ここでいえることは，生存と排除，生存と死といってもいいけれども，そういうエッジに立ったとき，その場所に佇立するしかなくて，そこからもう一回生き直すというとき，命はどういうふうに動いていくのだろう，ということですね。

実に重い経験，重い言葉である。筆者はわたしたちのこれからの生き方，社会のあり方を考えるとき，何らかの形で自然とのつながりをとりもどすことが重要だと考えていたので，大変ショックを受

けた。大塚さんは自らの感性に忠実にしたがって，自ら選んで，自然との豊かなつながりのなかで生きてこられた。大塚さんにとって自然は命の充実のまさに基盤ではなかったか。その基盤を，自然そのものを，人間の文明が生み出した放射能によって破壊される，そのような形でいきなり自然とのつながりを断たれる，それは一体どのような経験なのだろうか，この先何を支えとして生きていくことができるのだろうか。一度会ってみたい，そう思っていた。

学会の鳥取大会で初めて大塚さんにお目にかかることができた。お話も聞くことができたし，フラダンスも拝見した。落ち着いた，穏やかな表情をされていた。フラダンスは不思議な感じがした。祈りといわれればそうなのかもしれない。無言のうちに大塚さんの思いが伝わってきたような気がした。ゆったりとした動きには誠実さと厳粛さがあった。それは一種の強さであるように思えた。

本節のテーマは，松場登美さんと大塚愛さんの暮らしと生き方から自然と「いのち」との関係を考えることである。この観点からいえば，お二人の生を深いところで支えているのは，豊かな自然のなかで自らの感性を開いて暮らしてこられた，その蓄積ではないかと思われる。大塚さんの経験はご自身を支えること自体が困難なほど辛いものであったに違いないが，それでも踏ん張って，他者をサポートする活動に向かうことができたのは，それが自然のなかで生きてきた「いのち」の現れだったということであろう。

(4) 死と向き合う

鳥取大会のセッション２「課題を希望に変える技法―ボランタリーな生き方が創造する地域のつながり」では，3 名の講演者が登壇された。彼らはみな過疎化が進んで暮らしが立ち行かなくなったり，人生の最期を人らしく迎えることができなくなった人々の苦しみに出合って，制度に頼ることができないなかで，やむにやまれぬ気持から動き出し，次々と現れる問題に一つひとつ対応し解決していくために，知恵を絞り，情報を集め，ネットワークをつくって，人として生きられる状態をつくりだしていた。その生き方はまさしくボランタリーなものであったが，そういう言葉で表現することに違和感を覚えるほど，地域の人のために活動されていた。筆者はスクリーンに映し出された映像をみて，講演の最初から涙が止まらなかった。そうした活動が地域の人々の生活にもつ意味が，それこそ身体で実感できたからである。感情を抑えようとしても抑えきれるものではなかった。

ここでは，そのうちの一つ，NPO 法人ホーム「ホスピス宮崎」理事長である市原美穂さんの「かあさんの家」の活動を取り上げる。「かあさんの家」では，末期ガンのような，余命幾ばくもない高齢者，ほかの施設では受け入れてもらえない人を，普通の民家で，料理のにおいや生活の音のするなかで，お世話して看取るという活動をしている。その基本理念は，人生の幕を閉じるとき，自分の生きて来た場所で，馴染みの人に囲まれて過ごしたいという願いに応えて，人生の最後まで生活者として生きられるよう支えること，何よりも本人の意思を尊重し，本人が決めたことを最善としてサポートすることである。家族にも，安心して寄り添って悔いのない看取りができる場を提供することである。市原さんは次のように語っている。

> 家族の方には，暮らしのなかで看取るということを自分達の手に取り戻して欲しい。病院で看取る時もモニターは見ないで，ちゃんと手を握って，声をかけて欲しい。安らかな生と死を支え，命を受け止める，そんな地域にしたい。死は特別なことではありません。みんな死ぬ。それは自然な経過です。

市原さんは，死を自然なこととして「一人ひとりが命を最後まで生ききること」が本人にとっても家族にとっても幸せなことだと考えて，このようなサポート体制を整えられたのである。この活動の意義は説明するまでもないだろう。

しかし，きっかけは個人的なものである。お父さんの死に際してのお母さんの深い悔恨である。お父さんは病院で亡くなったが，お母さんはずっと付き添っておられたにもかかわらず，最期に立ち会えなかった。病室から出されてしまったのである。傍らにいたのは医師と看護師だった。お父さんには最後に伝えたいことがあったのではないか，それを受け止めてあげることができなかったという後悔にお母さんがずっと苦しまれるのをみて，人の最期のあり方を考えるようになったということである。個人的な動機が「かあさんの家」を生んだのである。

市原さんの活動には学ぶべき点が実に多い。ひとつだけ紹介すれば，市原さんは，人生の最期を人らしく迎えることができなくなった人々の苦しみを前にして，やむにやまれぬ気持から動き出した。そして種々の工夫を積み重ねて，最後まで人として生きられる場をつくりだされた。ナントカ学というような専門知をもって現実に臨み解決しようとしたのではない。「命」という切実な問題を前にして何とかしたいという思いが，必要なことを学び，つなぎ，組み立て，実践させた。ここには専門知に囚われることのない視野の広さと柔軟性がある。「実践の知」とはこのようなものではないだろうか。

(5) 日本ボランティア学会から学ぶ

日本ボランティア学会の存在を知ったとき，これは参考になる，学会の取り組み全体を綿密に分析・検証すれば，豊かな成果が得られる，そういう直感があった。本来，そうすべきであるが，それは今後の課題として，本節ではこれまでと同様の観点から学会の試みのエッセンスを抽出し，地域学に組み込みたい。

学会は，一人ひとりの命の可能性を尊重し，生かしきることを究極的な目標として，「もう一回つながりを社会からつくっていくこと」を目指したのではないか。それを社会の形で示せば，「共に生きあう社会，生命系が豊かに生きる社会，多様性を尊重する社会」（播磨さんの言葉）ということになるのであろう。それを実現するには，現実の生活や社会を直視して，問題を見抜き，一つ一つ丁寧に改めていかなければならない。そのために専門知だけでなく現場での様々な経験と知を集め，練り上げ，鍛え上げて，「市民知」として再び現場に戻していこうとしたのである。

この循環プロセスの起点は個人＝市民，すなわち「ボランタリーな生き方をする人」であるが，これまでの検討から明らかになったように，「市民」はあらゆるものから切り離されて，知性の力で自律・自立した個人（西欧近代の個人，市民）ではない。「他者の声の訪れ」や「内なる声」が示しているように，自然などの「他者」を自らのうちに織り込んだ存在，「他者」に応答する命をもった個として理解されている。さらにいえば，松場さんと大塚さんの例が示しているように，わたしたちの目に「ボランタリー」と映る生き方は，自然をはじめとする豊かなつながりに支えられているからこそであろう。学会の考える個人＝市民とは，自律と共同と連帯を志向する個である前に，自然と命に向き合って，命の充実を目指す存在だといえるだろう。

次にまなざしをどこに向けているかといえば，「人・生活・生命」である。国家でも経済でも制度でもない。地域そのものでもない。むしろ人の命と暮らしを見つめ考えることからそうしたものを捉え返し，変えていくのである。地域はそのための現場のひとつであろう。要するに，見出された問題に応じて現場が決まるのであり，ときに政治の領域にまで踏み込むことになるのである。

研究大会の雰囲気にも触れておきたい。大会には地域性や関係した人々の思いが反映されて，大会

ごとに雰囲気は異なっているのかもしれないが，学会という言葉からイメージされるものとは程遠いものだった。筆者が参加したのは，2011 年度大会（立命館大学），2012 年度北浦和大会，2013 年度鳥取大会の 3 回であるが，なかでも北浦和大会は強烈な印象を残した。会場の一つは商店街で建築中の民家であった。コンクリートがむき出して，まだ足場が組んである，そういう建物のなかで話し合ったのである。作業員のような人が足場の上で聴いておられた。実践者の発表も質疑応答も形式ばらないで内容のある見事なものだった。懇親会は高校の会館で行われたが，多士済々というのか，国会前でのデモに参加してきたばかりだという和服姿の女性がいらしたり，作業服を着て身体から元気が発散している人もおられた。ネクタイ姿を見ることはなかった。熱気と高揚した気分のなかで「これでいいんだ」と心底納得した。

以上が筆者の理解と経験であるが，地域学は何を吸収できるだろうか。最初に，実践と知の循環プロセスについて考えると，まさに地域学が目指すべき姿である。専門知・アカデミックな知は深く掘り下げようとするだけ狭くなりがちである。自らの枠に囚われがちでもある。「生活の知」「経験の知」「実践の知」「アマチュアの自由な発想，身体的直感，暗黙知」など，表現は様々であるが，地域学は地域や現場に存在している知，潜在している知に謙虚に学ばなければならない。様々な知を組み合わせて地域に戻し，そこで鍛え上げられる。このサイクルを繰り返し積み重ねて地域や社会に貢献できるようになるのである。その過程のひとつとして，地域学研究会大会は重要であるが，もっと工夫できるのではないか。北浦和大会のような自由な空間でありたい。

一人ひとりの命の可能性を尊重し，それを生かしきることは，地域学にとっても不可欠な目標である。地域学は地域性を重要な前提の一つとしている。地域性は個々人に先立って存在し，支えであると同時に制約でもあるが，なぜ地域性を把握しようとするかといえば，具体的には様々な理由があるとしても，究極的には「一人ひとりの命を生かし切ること」を目指しているからである。日本ボランティア学会はそのことを再確認させてくれた。

地域学にとって「〈わたし〉の〈いま，ここ〉からの視点」と「生活からの視点」がきわめて重要である。学会の場合は，「市民起点」と「人・生活・生命」であろう。表現は異なるが，両者を隔てる距離は当初思ったよりはるかに小さい。異なるのは次の点であろう。〈わたし〉はボランタリーな生き方をしているとは限らない。意欲的なときもあれば，腰が引けてしまうときもある，そんな「普通の人」である。そういうところから考えている。逆に「生命」については，地域学は十分意識していなかったかもしれない。今回学んだことの一つである。地域学とボランティア学との出会いは，それぞれ足りないところを補い合う機会になったかもしれない。

両者を隔てるもののように感じるのは，栗原さんのいわれる「もうひとつの公共性と政治」に関してである。「当事者起点」から「もうひとつの公共性」へという方向性自体は，地域学も同様であるが，「民意を通す政治的な回路を構築すること」「行政に公助の公的責任を問う」という点については，真正面から取り上げることはしていない。もちろん考えるべき事柄なので，正確にいえば，地域学部教員の課題だというべきかもしれない。大学の場合，地域との連携を重視しているが，「地域」のなかで大きな位置を占めているのが行政だからである。連携の実質が問われている。

おわりに—地域学の現在

地域学総説での取り組みを振り返ってみると，わたしたち教員は悪戦苦闘しながら，地域学の基盤となるもの，「地域学の精神」とでもいうべきものを探求してきたといえる。とくに筆者の場合，「地

域を考えるととき，どこに足場をおいて，どこにまなざしを向ければいいのか」という問いをもち続けてきた。「地域を見るまなざし」を確認しようとしたのであるが，この探求はまだ終わっていない。

ここからは，地域学をその形成過程を含めて手短に紹介したのち，これまでの検討結果を地域学に組み込むことを試みる。

まずは，地域学を構想した経緯である。地域学部では，地域学を regional sciences と複数形で表記しているが，regional science と単数形で表現される場合がある。これはアメリカのウオルター・アイサードが唱えたもので，「地域科学」と訳されている。アイサードによれば，地域科学とは，地域で生起する社会的諸事象を科学的方法によって観察・分析し，考察して，客観的法則を発見しようとするものである。また，「地域科学者の中心的な関心事は経済的諸事象が地域に及ぼす影響，事象に関することである」という[12]。つまり，地域科学の関心は主に経済社会に向けられていて，この観点から地域を客観的に分析して，問題を科学的に解決しようというのである。したがって，地域科学では数量的，統計的分析が重視される。アイサードは 1954 年に後に「国際地域学会」となる学会を立ち上げている。その支部である「日本地域学会」が発足したのが 1962 年であるから，地域科学は半世紀以上の歴史を有している。地域学というとき，このような地域学が想起されるかもしれない。地域学部の地域学も，地域を見るときの視点の一つとして，すなわち「客観的・構造的視点」として「地域科学」を組み込んでいる。

地域を外から冷静に観察してその特質と問題の解決策を「客観的，科学的に」捉えようとする地域科学は，確かに重要である。地域学部になる前に，わずか 5 年間であるが，「教育地域科学部」だった時期がある。地域への取り組みはこのときに始まるのであるが，当時は「地域科学」的なものを目指した。ところが，筆者はどこか物足りなさを感じていた。今思うと，地域科学では人の存在というか，個々人が抱いている思いや切実さ，願望といったものが感じられなかった。それで地域学部では，素朴に「なぜ，今，地域なのか，地域学なのか」という問いを設定し，わたしたち「一人ひとり」を中心に据えて考えることにした。地域学を構想する場となったのは「地域学入門」や「地域学総説」という授業である。教員は地域学の意義と輪郭を学生たちにわかりやすく提示しなければならない。

授業では試行錯誤したが，それを通して気づいたことがある。ひとつは講義を聴くときの学生たちの態度の違いである。授業では地域で素晴らしい実践活動をされてきた方々にもお話をしていただいたが，教員が話しているときとでは，学生たちの態度が全く違うのである。いつもはなんとなく気が抜けているようなのだが，実践者のときには食い入るようにして聴いている。表情がまるっきり違うのである。教員としては立場がないが，いい勉強になった。実践者の語りがなぜあれほどまでに学生たちをひきつけ，心を揺さぶるのか。考えてみると，実践者は生活から離れたところで問いを立て，考え，実践してこられたわけではない。自分のなかにある欲求や願望，切実な問い，あるいはやむにやまれぬ気持，そういうものに衝き動かされているように思えた。だからこそ，聴く者に何かしら「確かなもの」を感じさせるのではないのか，そういうことに気づいたのである。

そうだとすれば，研究者・教員である前に，まずは自分自身にしっかり向き合って，「生活者」として，足元から，生活の現場から考えることにしよう，実践者に学ぼう，そう強く思ったのである。これが学部教員の，少なくとも筆者の基本的なスタンスになった。

もうひとつ気づいたことがある。「地域」が人の口に上るようになった背景には，一過性のものではない，何か根源的な欲求があるのではないかということだ。それは実践者の語りのなかで強く感じられたし，アカデミックな研究においても確認できた。つまりこういうことである。わたしたちは様々な「つながり」や「関係」に支えられて生きているはずであるが，今はそのことを実感できなく

なっているのではないか,「根っこ」を失ったことが「不確かさ」や「虚しさ」,「生きにくさ」を感じる一因になっているのではないか, だからこそ,「つながり」や「関係」を何らかの形で「とりもどそう」としているのではないか, ということである。ここでいう「つながり」や「関係」は,「絆」という言葉で表現されるような人と人との関係や結びつきだけをいうのではない。自然との関係, 土地との関係, 過去や過去の人々との関係を含めて, わたしたちをとりまくすべての「つながり」や「関係」である。「地域」が注目されているのも, こうした「〈つながり〉をとりもどす」という動きの一部ではないか, と思ったのである。

このような要請に応えるには, 地域学はどうすればいいのか。地域学の究極の目標として設定したのは,「わたしたちの一人ひとりが人として生きられること」「誰もが生きられる状態」を実現することである。具体的な目標としては, 地域をつながりや関係の束と考えて,「現実の地域」と「望まれる地域」(わたしたちがこうであってほしいと思う地域) との間にある隔たりをできるだけ埋めていくことである。そのために, 地域を見る視点としてこれまで５つを確認することができた。「客観的・構造的視点」に続いて, 生活の現場から生活者として考える「生活の視点」,〈わたし〉の〈いま, ここ〉から始めてみんなにかかわる問題を自分のこととして把握しようとする「〈わたし〉からの視点」, 人の生を地域の過去から未来に続く営みのなかで捉えようとする「歴史的視点」, そして, 人を移動する存在と見て, そこから地域性を捉えなおし, 地域で生きる意味を考える「移動の視点」である。「客観的・構造的視点」を別にすれば, ほかの４つの視点は,「地域のなかで, 地域とともに考えよう」とするものである。

こうしてみると,『地域学入門』での最も重要な検討課題の一つは, 自分の立つべき位置はどこなのか, まなざしをどこに向けるべきか, ということだった。わたしたちが学んだのは, 目を向けるべきはまずは自分の足元であり, そこからまなざしを空間的にも時間的にも広げていくことである。自分の足元, すなわち自分自身を, 自分の育ってきたところを, 生活しているところをよく見てみよう, そこを足場として, 生活する当事者として考え, 行動しよう, ということである。もちろん, 地域から少し距離をおいて, 生活の場を枠づけている大きな構造を捉えようとするまなざしも欠かせない。このような複眼的なまなざしをもってはじめて,「つながり」や「関係」に気づき, とりもどすことができるのではないかと考えた。「とりもどす」といっても, かつてあったものをそのまま再現しようというのではもちろんない。以上がこれまでの地域学である。

次に, 今回の検討から何を学ぶことができたのか, 何を吸収できるのか, を考える。内山さんと新妻さんの講演からは, わたしたちが知性だけでなく, 身体や命自体によっても認識していることを学んだ。より深いのは身体と命による認識である。とりわけ, 自然を認識する場合がそうである。内山さんは「身体で自然をつかんでいく, 命で自然をつかんでいく」捉え方があるのではないかと語り, 新妻さんは「いのちをいただき, いのちをいかす」と表現された。わたしたちは自然から何を受け取ってきたのか, 自然とのつながりを失うとはどういうことなのか。自然を物理的環境として捉えるだけではなくて, 自然と命との深いつながりを見つめ再考するところから, 現実のありようを捉えかえし, これからどんな地域を, どんな社会を目指すのか考えようというのである。日本ボランティア学会から学んだのは, 自然と命に向き合って, 命の可能性を生かしきること,「人・生活・生命」から社会を変えていくことである。いずれの指摘も自然と命にかかわることである。

これまでの地域学に欠けているのは, あるいは不十分なのは, まさに, 自然と命に向き合い, そのつながりの意味を考えることである。また「命の可能性を生かしきる」ということである。地域学部では, 地域学ということで, 素朴に「なぜ, いま, 地域なのか」「地域とは何か」を問うことからスター

トした。その結果,「つながりをとりもどす」と地域を見る５つの視点という成果をえることができた。しかしその一方で, 地域（性）を捉えることやその意味を考えることに焦点化しすぎて, 視野を狭めたのかもしれない。自然と命との関係,「いのちをいただき, いのちをいかす」「命の可能性を生かしきる」という観点から地域学を構想すれば, 地域学の組み立てが変わるかもしれない。もっと大きな世界が開けてくるかもしれない。今後はこの点を地域学の究極の目標のなかに新たに組み込んで, 地域学を深化させたい。

もうひとつ, 地域学そのものではないかもしれないが, 日本ボランティア学会の目指した実践と知の循環プロセスの構築は, 体系化はともかくとして, 地域学部が引き受けるべき使命であろう。実際には, これはかなり困難な課題である。まずは専門知の枠にとどまらず, 様々な知に謙虚に学ぶ姿勢が求められる。さらに, そういう知を集め, 共有し, 全体を構想する努力をしなければならない。そして, 成果を地域や現場に返し, 再び鍛え上げていく, その辛さに耐えなければならない。大変な仕事である。しかし, 越境することは知的な喜びとなるのではないか, 挫けそうになりながら互いに励まし合うことは, 得難い経験となるのではないだろうか[13]。

---

[1] 柳原邦光・光多長温・家中茂・仲野誠編『地域学入門―〈つながり〉をとりもどす―』, ミネルヴァ書房, 2011 年。

[2]『日本ボランティア学会 2013/2014 年度学会誌（終刊号）』, 2015 年 3 月 25 日。なお,巻末の「資料集」には学会の設立趣意書をはじめ,活動歴,学会誌の総目録などが掲載されている。

[3] 第 2 部「〈自然〉と地域学」
・塩野谷斉（地域学部地域教育学科教授）「子どもの育ちと地域環境−『森のようちえん』を中心に−」
・三笠孔子（豊岡市役所コウノトリ課）・菊地直樹（兵庫県立コウノトリ郷公園講師）
「コウノトリとの共生−地域づくりと地域資源の視点から−」
・永松大（地域学部地域環境学科教授）「地域をみる視点−生きものの調査−」
・白川勝信（芸北・高原の自然館主任）「生物多様性をキーワードに自然と人を結ぶ−小さな町の小さな博物館−」
・内山節（哲学者,立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科教授）
「自然について考える−『文明の災禍』ということ−」
・新妻弘明（東北大学名誉教授）「地域とエネルギーから現代文明を問い直す−震災を体験して−」

[4] 現在,農山漁村文化協会から『内山　節著作集』（全 15 巻）が刊行中である。

[5] 内山節『文明の災禍』, 新潮社, 2011 年,参照。

[6] 新妻弘明『地産池消のエネルギー』, ＮＴＴ出版, 2011 年を参照。

[7] 第 5 章「生きられる地域のリアリティ―反省の学としての地域学を目指して」（仲野誠）を参照。唯一の例外は,人の生において地域のもつ意味を近代との関係を視野に入れて考察した第３章「文化現象としての地域―生の充実を求めて」である。この章の執筆者は吉村伸夫氏であるが,惜しいことに昨年逝去された。佐々木和貴編『文化現象としての近代―吉村伸夫遺稿集―』（金星堂, 2015 年）には,イングランドにおける近代の成立とその特質が見事に描かれている。

[8] 栗原彬「地域におけるボランタリーな生き方―地域学への期待」,鳥取大学地域学研究会第２回大会講演・シンポジウム「地域学への期待と課題」（2011 年 12 月 10 日）。

[9] 元新聞記者,現在は財団法人たんぽぽの家理事長,日本ボランティア学会副代表。ソーシャル・インクルージョンをテーマに,アートの社会的意義や市民文化について問いかける事業を実践されている。

[10] 他郷阿部家と石見銀山生活文化研究所代表取締役所長,服飾ブランド「群言堂」デザイナー。著書に松場登美『群言堂の根のある暮らし　しあわせな田舎　石見銀山から』（家の光協会, 2009 年）がある。松葉さんについては,森まゆみ『起業は山間から―石見銀山　群言堂　松場登美』（バジリコ, 2009 年）,柳原邦光「松場登美さんの仕事に学ぶ」,『地域学論集』第 7 巻第 1 号（2010 年）を参照。

[11] 大塚愛「国が守ってくれないなら,親が子どもを守るしかない―福島をのがれて,岡山に生きる」,『日本ボランティア学会 2013/2014 年度学会誌（終刊号）, 2015 年, 22 - 26 頁。

[12] ウオルター・アイサード『地域科学入門(1)』,大明堂,1980 年,参照。

[13] 湯浅正恵「日本ボランティア学会が解散して考えたこと」,『日本ボランティア学会 2013/2014 年度学会誌（終刊号）, 87 - 93 頁。

（2015 年 6 月 5 日受付，2015 年 6 月 11 日受理）